

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：34504

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652173

研究課題名(和文) グローバル・ヒストリーとしての1848年革命 ドイツ人亡命者のアメリカ移住から

研究課題名(英文) The Rise of the Republican Party: The Experience of German Forty-Eighters and their Turner Clubs in the United States

研究代表者

田中 きく代 (Tanaka, Kikuyo)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：80207084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：米墨戦争での獲得地に奴隷制度を拡大させないとする、1848年のフリーソイル党の政変は、南北戦争に至る一コマとして一国史の範囲で解釈されてきた。しかし、グローバル・ヒストリーの見地からは、18世紀中頃から19世紀中頃までの間に、北大西洋海域で作動した、ヨーロッパから周縁地域へのリベラリズムの波及と蓄積のメカニズムに注目される。アメリカでの奴隷制廃止運動のリベラリズムは、このメカニズムによって枠組みを与えられたもので、1850年代の共和党への再編過程もそれに左右された。実際には、1848年革命の特にドイツ系政治亡命者による、彼ら彼女らのターナークラブを通しての政治活動や文化運動が重視される。

研究成果の概要(英文)：The political upheaval of 1848 in the United States which produced the Free-Soilers was explained as a beginning to the Civil War. From the view of global history, however, we can emphasize the role of a mechanism which was operated in the Atlantic Ocean from the middle of the 18th century to the middle of the 19th century, as a transplanting and accumulating system of European liberalism to the peripheries such as the United States. The anti-slavery movements in the United States were especially instituted by the mechanism. In fact, when we look at the realignment processes of the political parties to the Republican Party in the 1850s, we deeply realize that the political refugees of 1848 revolutions in Europe to the United States, especially, the German Forty-Eighters and their Turner movements were influential to a great degree.

研究分野：史学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：1848年革命 政治亡命者 ターナー・クラブ ドイツ系移民 革命の伝播 ネットワーク 共和党 奴隷制廃止運動

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は従来、南北戦争前史として、第二次大政党政党制度から第三次大政党政党制度への再編のプロセスを研究してきた。そして、1850年代に登場したフリーソイル党、人民党(ピープルズ・チケット)、禁酒主義政党、ネイティブイズム政党(ノーナッシング党、アメリカ党)、共和党の諸等が、第三政党として競合する中で、次第に奴隷制進展反対を唱える共和党が勢力を強め、1860年には政権政党となるプロセスを検証してきた。

そして、一般に移民は民主党を支持する傾向が強いにもかかわらず、ドイツ系の場合は、少なくとも1858年以降に共和党支持に転じたことを論じ、その特異性と同時に、民族文化的な支持懸案の重要性を指摘してきた。実際、カール・シュルツのようなリーダーたちは、共和党支持を鮮明に表明し、リンカーンの政府で要職を占めさせた。しかし、さりとて、なぜ、ドイツ系移民はリンカーンを支持することになったのか。

また、リンカーンは共和党左派ではなく中道であったから、禁酒主義や移民反対の旧ホイッグ系と民主党系の一部の意見を、奴隷制進展反対のイデオロギーで纏めることができたという従来の通史の見解もは誤っていない。しかし、なぜ、禁酒主義や移民反対ではなく、奴隷制進展反対のフリーソイル主義がプライオリティを得たのか。なぜに、リンカーンに最大公約数を見出せたのか。その本質的な理由の解明はなされてこなかった。

研究代表者は、長く、これらの問題に答えようし、ドイツ系の詳細な動向の分析が必要なこと、さらには、カール・シュルツのような重要なドイツ人政治家のみではなく、ずっと市井のドイツ人の検証に活路を見いだせるのではないかと考えてはきたが、ごく最近まで、それを実際に解明するための糸口を見いだせていなかった。

しかし、D・Doweらの*Europe in 1848: Revolution and Reform*や、J・W・Evansの*The Revolutions in Europe, 1848-1849*や、L・Namie ナミエーらの*1848: The Revolution of the Intellectuals*など、グローバルな視点から、出身地の1848年革命を捉える研究が出てきたこと、またアメリカ合衆国で、ドイツ系の歴史や文化研究が急速に進んだことが転機となった。ようやく、1848年のフリーソイルの出現、その後の奴隷制進展反対のイデオロギーの背景に、1848年革命のアメリカへの一般の政治亡命者の存在があるのではないかとという仮説を設定できるようになり、南北戦争前史における、ドイツ系移民の貢献について検証する作業を進めることができるようになったのである。

特に、このプロジェクトの開始にあたっては、ドイツ人 Mischa Honeck の *We are the Revolutionists: German-Speaking Immigrants and American Abolitionists after*

1848(2011)が出版されたことは、画期的であった。研究代表者は、現在、この研究の成果の一部として、この本の翻訳にあたっている。

2. 研究の目的

フリーソイラーズ(自由土地党員)の出現による1848年の政変は、南北戦争前史として、米墨戦争での獲得地に奴隷制度を拡大させないためであったと解釈されてきた。しかし、一国史の枠組みを越えて、北大西洋を挟む歴史の文脈で、この1848年の政変を捉え直すことはできないだろうか。すなわち、18世紀中頃から19世紀中頃の1世紀間に大西洋海域におけるヨーロッパからの周縁地域へのリベラリズムの波及と蓄積のメカニズムが、アメリカ合衆国でいかに作動したのか。またそれは、南北戦争へと至る政治過程でいかなる役割を果たしたのか。すなわち、ヨーロッパの1848年革命とそれに至る過程、またその後の動静は、周辺地域のアメリカの政治や社会に、どのような影響を与えたのか。

本研究では、こうした問題意識から、1848年革命の政治亡命者フォーティエーターズ(48年者)と、それらの人々の本国からヨーロッパ各地を通してアメリカ合衆国へと張り巡らされた広域ネットワークに関する研究をすることで、1850年代の政党再編におけるドイツ人移民の貢献、ひいては南北戦争の原因論の一部として、ドイツ人移民を積極的に評価したい。

北大西洋海域における、中心から周辺への、リベラリズムの波及と、それが周辺で蓄積されるメカニズムについては、従来も環大西洋革命に関する多くの研究で、指摘されてきた。それらの研究では、1848年革命は、このメカニズムの最終段階として論じられ、穏健なリベラリズムのアメリカへの伝播が強調されてきた。しかし、D・ドウらの研究を除けば、グローバルな視点から、1848年の革命の直接的な影響が問われることはなかった。ことに、一般の政治亡命者のヨーロッパ内あるいはアメリカへの国外移住が問題にされることはなかった。

一方、アメリカ合衆国史では、1848年革命の移住者たちを、「フォーティエーターズ」として評価し、彼ら彼女らが、政治や社会に先進性をもたらしたことに注目してきた。しかし、カール・シュルツなど著名な政治家となった亡命者には言及しても、ドイツのみならずそれ以外からの亡命者にも焦点をあて、また日常的なレベルまで掘り下げ、彼ら彼女らの足跡を辿りえたものは皆無に近い。ましてや、世界的な移動のネットワークに注目し、市井の人間による、人、モノ、ことの総合的な移動を、1848年の政治亡命者に見ることはなかった。

ヨーロッパ史にしろ、アメリカ合衆国史にしろ、政治亡命者を1848年革命の失敗者とするネガティブな見方に囚われていた傾向があったからである。多様な出身の一般の政

治亡命者に光を当てることで、そうした偏見を払拭し、1848 年革命の精神をアメリカという周縁に積極的に移動させた存在として、再評価する試みがなされるべきである。

こうした試みのひとつとして、先述の M・ホネックの業績とともに、2009 年に刊行された、T・M・Roberts の *Distant Revolutions: 1848 and the Challenge to American Exceptionalism* も注目に値する。この本は 1848 年革命が世界的な奴隷制廃止の理念や運動に与えた普遍的な影響について触れている。アメリカ合衆国というヨーロッパの 1848 年革命の周縁部で、その理念が、フリーソイル党の Free Soil, Free Labor, Free Men の精神に埋め込まれ、やがて多様な共和党の中の良心部分を鼓舞するが、そのヨーロッパからのリベラリズムの注入は 1848 年革命の政治亡命者たちによってなされたことが強調されている。それによって共和党を形成した西部の人々の民衆自決の精神に、人民主権というグローバル・スタンダードの枠組みが与えられたことを再考する重要な手がかりを示してくれるものである。

かくして、フォーティエーターズとそのネットワークの研究が持つ可能性は大きい。ここで、その可能性について、まとめておくと、まず第 1 に、トランスナショナルな視座のもとに、アメリカ合衆国史とヨーロッパ史の接続を可能とするのみならず、アメリカ例外主義の克服について貢献できることが少なくない。つまり、政治亡命者のネットワーク、結節点での政治空間、一般の政治亡命者の活動がまずは具体化される。

第 2 に、アメリカ合衆国の政治史では、アメリカの二大政党制度を末端から捉え直すのみならず、その再編成のメカニズムを解き明かすことにもなる。従来の政治文化史の研究では、政党制度の再編の過程で共和党が確立する際に、ネイティビズム、禁酒主義運動といった民族文化的次元の主張が、なぜ奴隷制進展反対運動というイデオロギーにプライオリティを置くものになったのかを説明することが難しかった。しかし、フォーティエーターズを考察し、一般のレベルでヨーロッパからの思想の注入があったことを指摘することで、人民主権の枠組みが、日常的に言説化されていたことが解明できる。

3. 研究の方法

上記のような研究目的を遂行するにあたって、まずフォーティエーターズと、ターナークラブ(ドイツでのツルネルン運動の移植)の検証を当面の研究課題とし、それぞれに関する先行研究の確認とともに、著作や彼ら彼女らの文化空間の把握が必要である。彼ら彼女らの多くは活動方法として、新聞を発行し、日記をつけ、回想録を書いているように、自らの主張や、先進の思想を、文字であらわし、サロンや貸本屋を開くなどの文字を介した文化空間を利用した人々であるか

らである。

(1)フォーティエーターズに関する史料の読破が必要であるが、まずフォーティエーターズの定義をしておく、広義では、それは 1840 年代後半から 1850 年代にアメリカにやってきたドイツ語を話す人々を指して使うことが多い。狭義では、1848 年の革命の前後にアメリカにやってきた人として限定して定義されるが、さらに限定して、1848 年革命に直接的に参加した人のみを指す場合もある。共通して言えることは、カール・シュルツのような著名な人だけではなく、一般の無名の活動家も多く含まれることである。

また、1848 年の革命は、ヨーロッパ全体で同時に生じた出来事であるので、フォーティエーターズはドイツ系のみを指すものではない。ドイツ系他に、フランス系、スイス系、イングランド系、アイルランド系、イタリア系、スラヴ系の人々など、多様なナショナルリティを背景にする人々を指している。

もっとも、本研究では、あとで述べるアメリカのターナークラブの重要性を認識したために、ドイツ系に絞らざるを得なかった。ドイツ系はアメリカへの亡命者の圧倒的多数を占める人々で、ドイツ語を話すという意味では、オーストリアやボヘミアなどの地域からの亡命者あるいは移民も含まれている。

Wallman は推定数を 7 万人としているが、1848 年前後からの 10 年間にドイツからの移民のみでも、百万人以上のアメリカへの人口移出を経験している。ドイツ語系の一般のフォーティエーターズは、実際はかなり多くの数になる。当初の計画とは違って、途上のヨーロッパでのネットワークの結節点の研究では、ヨーロッパ内のリサーチが今後の課題として残されているが、アメリカでの政治亡命者の定着地での活動については、ある程度解明できたといえる。

(2)さて、ドイツ人移民やドイツ系のアメリカ人の過去の研究は、比較的最近になって進んできたといえるが、フォーティエーターズに関しては、C・L・Brancaforte 編や、Tolzman などが詳細な概観をしている。地域に特化したものとしては、ウィスコンシン州のウォータータウンを調査した先述のウォールマンが画期的で、その付録に添付された一般の住民の人名録による情報を通して、ドイツ人フォーティエーターズの出身地、宗教、職業などを把握でき、数量的分析を施した。

個別の比較的著名な活動家についても、著作の復刻、伝記などが多く、それらも有益に活用できた。S・Freitag らの S・V・ヘッカーに関するもの、Trefousse のカール・シュルツに関するもの、また Hephaestus Books のシュルツ、ヘッカー、アブラハム・ジャコビ、グスタフ・スツルヴェ、フランツ・シーゲルらのものは特に有用であった。W・Hinnens はフリードリッヒ・カップの、Randers-Pierson は、アドルフ・ドウアイの、それぞれアメリカとドイツでの活動を捉え

ていて、比較の視点を明示している。また、S・Piepkeは、マチルダ・アンネケの生涯を追っていて、彼女を女性活動家の一典型として把握できたことは特記できる。

(3) フォーティエーターズが創設時に指導したツルネルン運動のターナークラブ Turnverein の研究については、Pumroy が研究史料や文献の膨大なビブリオグラフィをまとめて、文献解題を試みており、参考になった。これは、全国的なターナーたちの活動の記録やフォーティエーターズの膨大な史料が整理されたもので、1995年の間に完成した。このプルムイのプロジェクは、1978年に、ターナークラブの体育連盟が19世紀末に創立した体育大学の歴史史料コレクションを寄贈し、インディアナ パーディュー大学がそれをもとにアーカイブを創設したことを契機に開始されたものである。

さて、ドイツ人のツルネルンが、ドイツ人の移民と一緒に、スイス、フランス、イギリスにも移植されたことはよく知られている。しかし、先述のミュラーのように、フォーティエーターズたちがアメリカのジャーマンタウンで、ターナークラブを通してツルネルン運動を継続していたこと、そしてターナークラブが社交クラブとして、あるいは政治的文化的な中核として重要な役割を果たしたことは、あまり知られていない。

そこで、ターナークラブの分析に関しては、ウィスコンシン州のウォータータウンの人口動態的分析と、ミュラーやマチルダといった活動家の回想録から再構成を試みた。プムロイの文献改題には、当初から現在までのターナークラブの組織についての調査も網羅している。全国に渡る創設時から現在までのターナークラブの詳細が、付録として記されているが、その中で各州で最初にターナークラブが組織化された年月について調べると、1850年代には、全米のほとんどの地域にまで広がっているのが分かる。

1850年代の政治過程でのターナークラブの政治化するなかち共和党との関連に関して、フォーティエーターズたちが、ヨーロッパのリベラルな思想や気風を継続的にアメリカに伝える役割を果たしたことを、ターナークラブでの活動を中心に抽出することで考察を進めた。ことにウィスコンシン州やオハイオ州の新聞や回想録などの史料が多い地域で、具体化することを試みた。

4. 研究成果

上記のような研究目的、並びに研究方法によって知得しえた成果を、次にまとめることにする。

(1) 1848年革命の亡命者には、二種類ある。具体的には、ウォールマンのウォータータウンの調査で把握できるが、一つは、政治亡命者としてアメリカへやって来た人たちで、10巻に上る1850年代の *Germans to America: Passenger Lists* [Glazier] である

程度は、確認が取れた人たちである。彼ら彼女らは、ドイツからの頭脳流出と言ってよいほどに、本国では大学生や知識人で、文筆家、思想家としてアメリカに根をおろしたものもいるが、同時にビジネスやその他の領域で名を成したものも多い。また、やがて本国に帰国し、故郷での社会改革に努めたものも比較的多いのがこの範疇である。

二つ目には、本国で職人や農業者であった人たちで、彼ら彼女らもまた、高度の知力を持つ、思想的には、むしろ先鋭的な存在でもあったが、従来、難民あるいは一般の移民と区別されずに扱われて、さほど注目されなかった人々である。この範疇の人々は、帰国せず、アメリカ社会に定住し、定住地での社会改革に努めた人が多い。

1848年革命の移住者の広域ネットワークについても、示唆するものは多い。当時のニューヨーク州、テキサス州、オハイオ州、ウィスコンシン州、ミネソタ州、アイオワ州は、フォーティエーターズの重要な拠点で、彼ら彼女らは、ドイツのみならず、フランスやスイス、そして東欧からも移住してきていた。

それらの州の都市部やその近郊は、彼ら彼女らにとって理想郷を作る絶好の実験の場であった。ホフマンのターナークラブに関する通史は注目に値するが、ドイツ人はニューヨークなど大西洋岸の港やニューオーリンズ港からアメリカ合衆国に入国し、その後中西部に渡ってジャーマンタウンというコミュニティを形成した。その過程で運動家たちは、ターナークラブを拠点に活動し、日常的には自宅で貸本屋や個人図書館を開き、持参した書物による知を共有のものにしようとした。また、定期的にパンフレットを出版したり、サロンを一般に開放したりしていた。

例えば、それは、Anneke の *Memoiren einer Frau aus dem badisch-pfälzischen Feldzuge* (1853) や、Mueller の *Memories of a Forty-Eighter* (1890) など、自伝や回顧録そして著作によっても知ることができた。アンネケについては、ピープケにその活動が分かる述べたが、彼女はウエストファリア生まれのカトリックで、1848年の革命に参加し、その年の9月、労働者階級の日刊紙である『新ケルン新聞』を創刊している。また、女性問題に関心を持ち、女性新聞も発行している。1849年7月にプファルツとバーデンでの革命に敗れ、スイス、ル・アーヴルを経由して、11月にニューヨークに到着している。1850年の3月に、ウィスコンシン州のミルウォーキーに定住し、1852年には男女同権の新聞を発行している。ニュージャージー州に移ってから、文筆でも女性解放運動に尽力し、禁酒運動や奴隷制廃止運動を支援している。

ヤコブ・Mueller については、彼の回顧録が多くを語っている。その *Memories of a Forty-Eighter* (1896) が1996年に英訳して再版されている。彼は皮加工業者の息子として、ラインラント-プファルツに生まれ、

大学で人文学を学び、法律家になった人物であるが、1848年革命では憲法をもとのドイツ統一、代議制、基本的人権を唱えた急進派のツルネルンにも参加している。革命直後の1849年6月にスイスを経て親族のいたオハイオのクリーブランドへ亡命した。1848年革命と同じエネルギーをアメリカでの改革にそそごうとした人物で、1852年には共同で、*Waecher am Erie* (*Sentinel on the Erie*) 紙を発行している。1854年には、オハイオで弁護士になり、1855年には、フリーソイル党の全国大会のオハイオ代表になっている。ツルネルン運動を継続させたアメリカでのターナー運動にも尽力し、文化面、教育面での改革も訴えている。1857年には、クリーブランドの市会議員、1860年には共和党全国大会のオハイオ代表を務めている。後にオハイオ州副知事になり、フランクフルトのドイツ領事にもなっている。

これら両人に見られるように、文字で残すこと、すなわち、手紙を書いたり、日記を書いたり、回顧録を書くことが、コミュニケーションの手段であったことが理解される。なかでも、新聞の発行は、ジャーマンタウンの世論形成において必須のものであった。19世紀後半のアメリカのドイツ語のジャーナリズムの進展は著しく、それが文字を介した文化共同体の構築に貢献したことが、ドイツ系の人たちの際立った特徴である。

もっとも移民社会においては、エスニック新聞は紐帯のために不可欠なものであったが、それらは一般に故国やアメリカでの情報を伝える側面が強い。しかし、フォーティエイターズたちの場合は、彼ら彼女らの理想を達成するための理念紹介であったり、世論作りであったりしたので、政治色が強く、コミュニティ内はもちろん、コミュニティ外にも強い影響を与えた。

(2) ドイツ人のツルネルンが、ドイツ人移民とともに、スイス、フランス、イギリスに移植されたことはよく知られている。しかし、先述のミュラーのように、フォーティエイターズたちがアメリカのジャーマンタウンで、ターナークラブを通してツルネルン運動を継続していたこと、そしてターナークラブが社交クラブとして、あるいは政治的文化的な中核として重要な役割を果たしたことは、あまり知られていない。このことをある程度解明できたことが、今回の研究の成果の重要な部分である。

プムロイの文献解題には、付録として当初から現在までのターナークラブの組織についての調査も網羅されているが、1850年代には、全米のほとんどの地域にまで広がっているのが分かる。一般に、F・ヘッカーが創設したとされる1848年10月のシンシナチの Cincinnati Turnverein が、アメリカで最初のターナークラブとされているが、その後の数年のうちに、亡命者たちが多く居住したドイツ人コミュニティのある東部や中西部の

都市に広がり、1855年までに、74のクラブができています。会員数も急増し、1855年から1860年の間に2倍になり、1万人を超えています。

ターナークラブの根源である、ドイツでのツルネルン運動は、「健全な身体に健全精神が宿る」の標語のもと、フリードリッヒ・L・ヤーンの著した *Deutsches Volksthum* (1810) や、*Deutsche Turnkunst* (1816) に影響を受け、「再興される独立ドイツは、全国統一、民主主義改革、若者の身体的なエクササイズ、愛国的な理想と自由への愛によって、実現する」というものであったが、1848年革命の勃発後、保守派と改革派に分かれた。保守派は1848年、4月にハノウに Deutsche Turnbund を結成し、一方、改革派の急進的なツルネルンは、バーデンの蜂起で知られる。

アメリカ合衆国のターナークラブは、ヘッカ、ストルーヴ、ミュラーたちのように、その急進派で、革命後、亡命した人々によって設立されたが、Milwaukee Turnverein を創立したケルンの共産主義連盟のA・ヴィリッチ、Indianapolis Turngenmeide を指導したベルリン蜂起の者T・ヒールシャー、アイオアの Davenport Turnverein のシュレスヴィヒ・ホルスタイン蜂起のH・R・クラウセンらも加えられる。創設期の著名な指導者であった、カール・シュルツをはじめ、フランツ・シーゲル、シグムンド・カウフマンなども、それぞれターナークラブを設立している。彼らは、ターナークラブを拠点に、政治、軍事にも指導力を発揮した人々である。次の世代が、クラブを通してビジネスやコミュニティの指導者、急進的な労働運動の指導者となったの対比される。

(3) フォーティエイターズたちが、ヨーロッパのリベラルな思想や気風を継続的にアメリカに伝える役割を果たしたことが強調される。ここでは、彼ら彼女らがアメリカ西部に入植し、アメリカの民衆自決の民主主義を作り上げるのに、草の根レベルから貢献したことを具体化する必要がある。

そこで、1854年に共和党が生まれた場所であるウィスコンシン州を例示したいが、同州は、1848年当時、州昇格とフリーソイル問題（奴隷制進展反対問題）で揺れ動いていた。そして、政治懸案としては、その他にアンテベラム期の三つの共通した社会改革とされた懸案である、奴隷制廃止、ネイティブイズム、禁酒主義が政治で顕在化されていた。これらは、一つ一つが独自の懸案であったというより、モラルの懸案として、一括して考えられる様なものであった。さらには、定数正や陪審制度の樹立など地域の社会問題の改革もあった。

フリーソイル党あるいはフリーソイルの懸案については、K・Sweeney や、J・Mayfield、T・R・Smith の研究が依然として輝きを放っている。また、奴隷制廃止運動については、Stuart の *Holly Warriors* が依然として秀逸

であるが、その他に最近では、McCarthy のもの、Vorenberg、ウィスコンシン州のそれについては McManus マクマウスがある。

ノーナッシング党のネイティビズムや禁酒主義については、Anbinder、Keller、Levine や、Tylor が詳しく参考になるが、土着のネイティビストたちは、投票の不正、労働条件の悪化、カトリック教徒の到来、飲酒、安息日の郵便問題、移民の学校への支援問題などで、新たに到来したアイルランド系やドイツ系の移民に敵愾心を抱いていた。それは、第三政党を生み、外国人を排斥しようとするものであったが、直接的にドイツ系を攻撃する暴動も起こっていた。伝統的なアメリカ社会を、政治的にも、経済的にも、社会的にも、宗教的にも、壊すのではないかと危惧していたといえる。ことに、ドイツ系のターナーたちは、ネイティビストには、政治的に極めて急進的で、独特の白い制服を着て、軍隊的な団体訓練をするものと映っていたのである。

こうした 1850 年代の状況の中で、ターナーたちは、地域の問題では、学校での体操のカリキュラム改革のみならず、より広い地域改革、すなわち公共の公園や遊園地の造成や、労働者の労働条件などの改善を訴えていたが、ピッツバーグで開催された 1855 年の全国大会では、奴隷制反対とともに、禁酒主義とネイティビズムへの反対を訴えている。自由と平等を主張するターナーたちは、北部の一般的な奴隷制への反感と手を携えることができたが、禁酒主義、ネイティビズムを克服するには、時間を要した。連邦レベルの政治では、シュルツと共和党首脳との接近など、ドイツ系の共和党への移行は、共和党がネイティビズムや禁酒主義よりも、奴隷制廃止あるいは奴隷制進展廃止を選択せざるを得なくなった、少なくとも 1858 年を待たざるを得ない。

しかし、ここで重視しなければならないのは、ドイツ系の末端の政治組織としてのターナークラブを注視して、ドイツ系の奴隷制廃止に関して果たした役割を考察することである。フリーソイル党から共和党への再編の過程で、改革懸案の中で奴隷制進展反対のイデオロギーがプライオリティを持つプロセスと、それにおけるドイツ系が果たした役割については、M・ホネックの *We Are the Revolutionist* が、貴重な最近の研究である。地域のターナークラブは、それぞれのターナーを連携させ、全国組織化していったが、その過程で、ドイツ系にとって奴隷制と移民反対との合い矛盾する懸案への対応が、常時重要なものとして論議された。しかし、重要なことは、アボリショニストや奴隷制に反対するアメリカの人々の協力によって、奴隷制を維持する勢力への対抗心がネイティビズムや禁酒主義を封じ込めていく方向を常に示していたことである。

南北戦争前までの、それが何時なのかを正確に推定する作業が必要であるが、ドイツ人

コミュニティでの中核を担うターナーたちは、共和党の支持者になり、それをコミュニティに訴えた。フリーソイル党から共和党への再編の過程で、確かにカンザス・ネブラスカ法案やカンザス闘争が再編の契機とはなかったが、実際の触媒的な影響力を持ったのはターナーたちであった。

実際、南北戦争でも、ターナーたちは義勇軍の師団を作り北軍の下に戦った。セントルイスやワシントンを守り、Union を防衛するために戦った。志願兵にも多くのターナーがいた。ドイツ師団のニューヨーク第 20 連隊、オハイオ第 9 連隊などは、ターナーによるものである。ヘッカ モイリノイ州の 24 連隊を率いた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

田中きく代「アメリカ合衆国におけるフォーティエーターズ研究の動向と展望 1848 年革命とアメリカ移民」『関西学院史学』第 41 号(2014 年 3 月)83 から 103 頁

[学会発表](計 1 件)

田中きく代「シンポジウム：伝播する革命とアメリカ 1848 年革命とフォーティエーターズ」アメリカ史学会年次大会(2011 年 9 月 18 日)

[図書](計 1 件)

北米エスニシティ研究会編、田中きく代他編、著『北米の小さな博物館第 3 』(彩流社、2014 年)総 326 頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 きく代(TANAKA, Kikuyo)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：80207084